



下部消化管画像診断のバイブル

胃と腸アトラスII 下部消化管 第3版

「胃と腸」編集委員会 編

松本 主之, 清水 誠治, 蔵原 晃一,
八尾 隆史, 海崎 泰治, 二村 聡 編集委員

大阪中央病院消化器内科顧問

平田 一郎

『胃と腸アトラスII 下部消化管 第3版』が2025年12月に発刊された。第2版の発刊は2014年だったので約10年が経過している。この間、下部消化管疾患において疾患概念の変遷、症例の新たな知見や画像の蓄積などが少なからずあり、これを受けて第3版では第2版に比して疾患カテゴリーの構成はより病態に即したものとなり、より多くの疾患が新たに項目に加えられ、非常にupdateな内容となっている。第2版では項目になく第3版で新たに項目に取り上げられた疾患として、小腸では特にARB関連腸症、家族性地中海熱遺伝子関連腸炎、MEITL、Burkittリンパ腫などが挙げられる。大腸ではさらに多くの疾患が新たにに加えられ、第2版の約2倍の疾患数が項目として取り上げられている。例えば“炎症の部”では、第2版では1項目の中に一括して組み込まれていたいくつかの感染性疾患が、第3版ではそれぞれ別個の項目として取り上げられている。また、特に新たな疾患として抗腫瘍薬起因性小腸・大腸炎(ICI以外)、免疫チェックポイント阻害薬関連大腸炎、下腸間膜静脈閉塞症、IBD-U、IgG4関連疾患、家族性地中海熱遺伝子関連腸炎、特発性後腹膜線維症、“腫瘍・腫瘍様病変の部”ではSuSA、Crohn病関連大腸腫瘍、腸結核に合併した癌、神経節細胞腫、神経周膜腫、PEComa、IMT、慢性活動性EBウイルス病、慢性骨髄単球性白血病の大腸病変、pseudolipomatosis、Lynch症候群、膵臓腺腫症などが取り上げられている。

周知のごとく、消化管疾患において画像形態診断は特に重要である。この診断をおろそかにしては正しい治療に結び付かない。病変が典型的な所見を呈する場合には診断困難性はないが、時として非典型的な像を呈する診断困難例に遭遇することもある。われわれは、臨床画像所見⇔標本の肉眼所見⇔病理組織所見のキャッチボールを繰り返しながら画像形態診断学に論理性を求めてきた。しかしながら、病変の画像所見から疾患を導く際、必ずしも論理的思考過程の下に行っているわけではない。画像の印象から疾患を想起して診断を下していることも往々にしてある。その場合、有力な武器となるのは症例の臨床画像・標本肉眼所見・病理組織所見を総合的にできるだけ多く見て診断の引き出しをいかに増やすかということである。この点において画像診断アトラスは恰好の教師である。したがって、教師となる画像には特に質の高いものが求められる。本書は簡潔で要点を押えた症例解説とともに、えりすぐられた非常に高品質の画像を提供し、読者を的確な診断に導いてくれる“下部消化管画像診断のバイブル”といっても過言ではない。本書に取って代わるAIの出現には多くの越えるべき高いハードルがあり、はるか先のことであろう。ぜひ、本書を座右の書として日常臨床に活用されることをお勧めする。

●医学書院 刊 A4 頁388 2025年12月

定価:19,800円(本体18,000円+税10%)

ISBN 978-4-260-05433-1